

2020/02/09

「決断のとき」 若林佳子師

もしあなたが電車に乗っているときに、ほかの乗客にじっと見られていることに気づいたら、どのように思うでしょうか。「私のことが好きなのかな、嬉しいな」「どこか変なところがあるのかな、不安だな」「じろじろ見るなよ、むかつくな」など、いろいろな感情を持つことでしょう。これらのことは、私たちが無意識に、「自分は人からどう思われているか」を考えていることを表しています。

私たちが生きていく上で、人との関わりは避けられません。店員や同じ車両に乗り合わせただけのような些細な関わりや、家族や友人のような親密な関わりなど、どのような関わりだったとしても、私たちは「人からどう思われているか」が気になります。

「人からどう思われているか」を気にすることの問題点は、「自分は相手にどう映っているのだろうか?」「自分は相手の期待に応えられているのだろうか?」「こんなことをしたら嫌われるんじゃないだろうか?」と考えて、自分を相手の目に良く見せようとするところにあります。私たちは無意識に他人の評価に自分の人生を左右させ、自由な選択ができなくなっているのです。

■あなたが求める自由とは何か

たとえば、自分の気にいらぬ校則に対してや、不本意な仕事をしている時、試験勉強や仕事で忙しい時、私たちは「自由になりたい」と思うものです。でも、それらのことを投げ出したり、校則を破ったりすることで、自由になれるわけではありません。

自分の思うまま、感じるまま、自分に正直に生きることが自由なのだと思える人もいますが、私たちの感情はととてもあいまいで、いつも同じとは限らないので、結局自分の自由に振り回されてしまうこととなります。

結局私たちは、自由に生きたいと思っても、何が自由なのか、よくわからないのです。それは、罪によって人が神から離れてしまったからだと言っています。

今、日本では、ほとんどの学校で進化論が教えられ、人は、猿人→原人→旧人→新人と進化したとされていますが、進化論はすべてが想像であり、その根拠と言われていた化石も、科学の進歩によってすべて同年代の同じ時期に存在した生物であることがわかり、進化を裏付けるどころか、むしろ否定するものになってしまいました。

人の起源について、聖書は初めから次のように述べられています。

「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)

人は、もともと神と一つになって生きるように、神のいのちを分けて造られました。ところが、アダムとエバが、悪魔にだまされて、神以外のものを信じたことによって死が入り込み、神が見えなくなってしまいました。その結果、人は神の愛がわからなくなり、神と同じ

いのちを持つ自分自身の価値もわからなくなってしまったのです。そこで人は、人からの評価を求めるようになりました。

これを一般に承認欲求と言います。承認欲求は、親の接し方や育ってきた環境によるものだと言われますが、もともと神の愛が見えなくなったことが原因であるため、どのような親に育てられたとしても、すべての人が持っているわけです。神と同じいのちの価値を持っているために、神が見えなくなったことで、自分の価値もわからなくなったことが人からの評価を求めるようになった理由です。その結果、人は「他人の評価＝自分の価値」と信じこむようになり、人に受け入れてもらえる自分になれるよう、他人の要求に合わせて生きるようになりました。そして、人から承認されることが自由になることだと勘違いするようになったのです。

つまり、私たちが求めている自由とは、承認欲求を満たしたいという願望なのですが、それは、本来の願望ではありません。人は、自分に正直に生きようにも、神を見失い、本当の自分の姿を見失ったため、的外れなことを望んで生きています。そのため、自由に生きているつもりなのに、息苦しさ、生きにくさを覚えるのです。自由に生きるためには、己を知る必要があります。

「他人の評価を気にしない＝とにかく我が道を進む」というのも、自己承認欲求の表れで、自分で自分を認めようという生き方です。しかし、いくら自分の長所を数え上げても、自分で自分をほめても、あまり効果はありません。そもそも自分の価値がわからないので、自分のことばに価値を見出すことができないのです。このように劣等感が強いと、何を聞いても自分が否定されたと感じるため、攻撃的になりやすくなったり、怒りやすくなったりします。しかし、神から離れた人間が劣等感を抱き、自分のことばを信じられないのも当然です。人間の価値観はその時々で変わり、絶対ではないからです。同様に人からの評価もまた永遠ではありません。ですから、人との関わりの中で承認欲求を100%満たすことは不可能です。

永遠に変わらないもの、それは神のことばです。神があなたをどう見ておられるか、神を知ることによって正しい事実を信じるようになっていくのです。神様にとって、あなたは神ご自身のいのちと同じ価値があります。たとえ、あなたが自分を受け入れられなくても、あなたは高価で尊いと評価しておられます。あなたの承認欲求を満たすことができるのは、神様だけです。私たちは自分に正直に生きようとしても、自分自身がよくわからないため、うまく生きることができません。しかし、本来の自分が神の一部であることを知り、真理に対して正直に生きようとするならば、本来の自分が求めている自由を見分けることができるようになるのです。

■あなたはいのちを選びなさい

「私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、【主】を愛し、御声に聞き従い、主にすがるためだ。確かに主はあなたのいのちであり、あなたは【主】が、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地で、長く生きて住む。」（申命記 30:19）

これは神がイスラエルの民に律法を与えた時のみことばです。律法は、行いによって神に認められるために与えられたものではなく、神にすがるために与えられたものです。自分の力によって律法を行うことは不可能であり、「信仰によって」律法に従おうとするとき、神にすがるしか道は残されていません。いのちを選ぶとは、神を選ぶということであり、いのちにつながるものを選ぶということです。

■いのちを選ぶとは

1. 自分の生きる意味や生きて良い根拠を知ること

もし、人が神に造られたのでなければ、私たちは偶然生まれたことになり、生まれたことに意味はありません。しかし、私たちの生きる意味は神にあります。神の命で造られ、神のご計画によって生まれてきたからです。神は私たちのいのちを造り、そして、イエス・キリストによって、永遠のいのちを与えてくださいました。人は、あなたがどう生き、どう死のうが、関心がないかも知れませんが、神はご自分の一部としてあなたを愛し、あなたと共に生きておられるのです。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ 43:4)

私たちの不信仰も罪深さも全て承知の上で十字架に架かれたほどに、神が私たちを愛し、共に生きておられることが、私たちの生きる意味であり、生きて良い根拠です。

2. どんなにつらい時も絶望しないで生きていける

神を知り、御子イエスを信じてクリスチャンになっても、辛いことが全てなくなるわけではありません。この世界に死が入ったことによって、神が見えなくなり、この世全体がゆがんでしまいましたから、矛盾や不条理はこの世からなくなりません。ですから、神を知り、信仰があっても、辛いことは起ります。しかし、神とその御心や御業を知れば知る程、私たちは忍耐力や勇気、希望を与えられ、前進する力を与えられます。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」

(I コリント 10:13)

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

(ローマ 8:28)

神は、どのようなことがあってもあなたを見捨てず、何度でも受け入れてくださいます。

神のもとに立ち返るなら、どんな方法かは分かりませんが、神は最終的に必ずすべてを益として下さいます。このことを知るなら、どんなに辛い時でも、絶望せずに、前進することができます。

3. 永遠に生きる幸せを知る

「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。」(伝道者の書 1:2-3)

「人には、食べたり飲んだりし、自分の労苦に満足を見いだすよりほかに、何も良いことがない。これもまた、神の御手によることがわかった。」(伝道者の書 2:24)

神をよく知らないと、私たちは目に見えることだけで物事を判断したり、人と自分を比較したりします。しかし、神はすべてをご存知であり、すべてのことについて正しく報いてくださいます。神は永遠なる方ですから、私たちの人生もこの地上で終わるものではなく、永遠に至るまで正しく報いてくださるのです。神が天国で与えて下さるものは、この地上で私たちが得たすべてのものは虚しいと思わせるほど、素晴らしいものです。

カルヴァンは、「人生の目的は神を知ることである」と言いました。神を知ることとは自分自身を知ることであり、そのことによって、自分が本当に求めているものを知ることができるようになるのです。

■人生の決断

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(マタイ 6:33)

1. ゆだねる

人生の決断は、神を知り、いのちを選び続ける選択をするところから始まります。聖書には「この人と結婚しなさい」とか、日常の決めなければならない選択について、いちいち「こうしなさい」とは書いていません。神の御心を求めてもわからない時もあります。ですから、決断の第一は、ゆだねる決断です。

生きるということは、目の前にあることを選択することの繰り返しです。何をするか、何を食べるか、誰と結婚するのかしないのか、どこに住むか、この仕事をするのかしないのか、それらについて感謝するのか不満を抱くのか、私たちは、自分の責任で自由に選択できます。

夏に教会学校で川遊びに行くとき、「もし溺れたら、自分で立ち上がろうとあわてないで、仰向けになり、そのまま流されていなさい。必ず助けに行くから。」と子ども達に教えます。私たちの人生にも同じことが言えます。人生に行き詰ってしまった時、どうすればいいのかわからないとき、無理に立ち上がろうとせず、天を見上げ、神の助けを待つことも大切です。「ゆだねる」とは、運を天に任せて後はなるようになれということではなく、神にお任せして

踏み出す勇気を受け取ることです。もし、迷ったら、まだ動く時ではないと、決断することも大切です。祈り続けるならば、必ず神が動くべき時を教えてください。

2. 平安と確信を持つ

何か決断をしなければならないときのポイントとして、「平安があるかどうか？」ということも挙げられます。それは、信仰を基準にしているかということです。自分の都合優先で決めるのではなく、「それが本当に正しい選択なのか？」「これに決めていいのか？」と迷うようなときには、聖書を開いて御言葉を受け取り、「平安と確信があるかどうか」で判断します。すると、「自分はこうしたい！」と思っけていても、なぜか心に平安がなかったり、良い選択であると思っけても「確信が得られない」ということがあります。決断とは信仰です。たとえ自分の思い通りの結果にならなくても、神に感謝するという信仰をもって進むことが必要です。平安がない時は、その場で待つことも大切です。

旧約聖書にルツという女性が登場します。ルツは異邦人でしたが、イスラエル人の夫と結婚したことによって、神様を信じるようになりました。しかし、夫に先立たれ、子どももなかったため、姑のナオミは、ルツに実家に帰って幸せになるように諭します。この時、ルツには二つの決断がありました。一つは姑の言うとおりに、実家に帰るという決断です。しかし、ルツは、もう一つのほうの決断、ナオミと一緒にイスラエルに行くという決断をしました。それは、ルツが神様を信じるようになっていたからです。ルツは、「あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」(ルツ 1:16) と言って、偶像を信仰する町に戻るよりも、苦勞してもナオミと共にイスラエルで神を礼拝して生きることを選んだのです。これは彼女の信仰による決断です。

3. 私に何ができるか

他人の評価に右往左往してしまう人の特徴として、自分の人生の基準が明確に定まっていないということも挙げられます。心理学者のアドラーは、「人からどう思われるか気にする、自分のことをよく見られたいと思う人は、自分にしか関心が向いていない」と言いました。あなたは神のいのちとつながった神の一部です。小さな自分自身ではなく、もっと大きな自分である神を見上げ、人生の目標を定めましょう。それは自己満足な目標ではなく、「どのように神と人に仕えることができるか」という目標です。「相手にどう思ってもらえるか」ではなく、「自分に何ができるのか」「相手に対して何ができるのか」ということです。

イエス・キリストは、最も大切な戒めとして、神を愛し、人を愛することをあげています。

「イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」

(マルコ 12:29-31)

また、イエス様に香油を捧げた女性に対して、「りっぱなことをしてくれた」と言われましたが、その理由は「彼女が自分にできることをした」からです。

「すると、イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。・・・この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。」(マルコ 14:6、8)

「神を愛し人を愛すること」「神と人のために自分には何ができるか」ということを求め、いのちにつながる選択をして生きましょう。

「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」(I コリント 10:31)